資料　70年代アメリカの国語教育
― Back to Basics を中心として ―

柳沢浩哉

アメリカの国語教育研究団体 NCTE（The National Council of Teaching English）の機関誌の一つに Language Arts 誌があるが，Langage Arts 誌では10年に一度ずつ“Reflection”（反省）を掲載し，そこで過去10年間の国語教育についての反省と今後の展望を行っている。この“Reflection”は，大学で国語教育に携わっている教官の投稿を集めたもので，アメリカの国語教育の動向とそれに対する教師の反応を知る上で便利な資料である。本稿で紹介するのは1979年56巻6号から8号にわたって連載された“Reflection”である。ここでは，reading，writing，communication の3つの専攻分野の合わせて15人の教師の投稿が集められているが，資料の提示に入る前に70年代のアメリカの国語教育を特徴づける Back to Basics と Right to Read について概説しておきたい。

Back to Basics

Back to Basics[1]（基礎に戻れ）は文字どおり基礎を重視せよという教育運動であり，70年代後半の国語教育を特徴づけるものである。70年代前半のアメリカでは，伝統的なカリキュラムに捉われないオープン式の教育が広く行われていたが，生徒の大幅な自主性を認めた“教育の人間化”と呼ばれるこの教育改革は，教師の権威の低下，基礎学力の低下などの弊害を生み出していた。Back to Basics はこのような“教育の人間化”に対する反動であり，進歩主義的教育に対する保守的な流れに立つ教育の巻き返しと見ることができる。Back to Basics には基礎的な知識・技能の重視だけでなく，しつけの強化・宿題の重視といった問題まで含まれていることも，この点から理解できるであろう。Back to Basics は国語教育を中心として展開し，アメリカの国語教育史上最大と言われる運動であるが，スローガンばかりが過度に強調され，その実体はつかみにくい。ここでは以下の4つの側面から Back to Basics を概観してみたい。

1. 過激な社会からの要求

児童・生徒の読み書き能力向上を求めた社会的要求は72年頃から行われていたが，この必要を広く訴え，Back to Basics の火つけ役となったのは一本の雑誌記事であった。1975年12月のアメリカ国内版ニューズウィーク誌に掲載された“Why Johnny Can't Write”[2]（児童はなぜ書けないか。）がそれで，アメリカの児童・生徒の著しい作文能力の低下を訴えたこのセンセーショナルな記事が引き金となり，その後少なくとも79年頃まで Back to Basics のスローガンがアメリカのマスコミ・教育界で叫ばれ続けたのである。

雑誌記事から始まったことに象徴されるように，Back to Basics は教師など教育の現場に直接たずさわる人々により始められた運動ではなく，世論の高まりによって始められた運動である。世論の高まりにより行政が動かされ，その行政の指導により教師が動かされるという構図が Back

to Basics 全般にわたって見られた。そのため，教師の間には世論（特にマスコミ）・行政に対する根強い反発があり，世論・行政が誤まった認識を持っているといった批判が数多く出されている。本稿で紹介する“Reflection”の中には Back to Basics に対し批判的な意見が多く見られるが，これらの批判も最終的にはこの点に行きつくものと思われる。

2. Competency Test（基礎能力テスト）の制定

Competency Test は Back to Basics の中核とも言うべきものであり，児童の言語治療を目的とした言語能力テストである。このテストは小学校の児童に対し各州が州法により独自に行い，州により多少の違いはあるものの，要求水準に達していない児童に対しては卒業や進級をさせなかったり，進級させても特別な治療クラスに入れて治療を行ったりなどの対策が取られるものである。この能力テストは76年頃から始められ，その後 Back to Basics の浸透とともに全米に広がり，79年４月の段階では少なくとも全米の四分の三以上の州で実施されている。[3] 最低能力の設定方法や少数民族への考慮を欠いている点など[4] いくつかの問題点を含んでいるものの，最終的にはアメリカ全土で定施されるであろうと言われている。

3. 基礎重視の教科書と教授法

Back to Basics はその名のとおり基礎的な技能・知識を重視しようという運動であるから，教科書と教授法が基礎を重視したものに代わるのは当然の成り行きである。しかし，Back to Basics で使用された教科書・教授法には未完成な面が多く，“Reflection”の中でも Back to Basics の教科書・教授法に多くの批判が向けられている。この点に関しては資料の提示の後に改めて検討してみたい。

4. 連邦政府の強力な資金援助

Back to Basics が行政の指導のもとに行われたことは 1. に述べたが，この指導は連邦政府の強力な資金援助を背景としたものであった。まず，教師は連邦政府の援助を受けるため，連邦政府に推薦された教科書と教授法を半ば強制的に使用させられる。そして更に，援助の効果を評価するために行われる，連邦教育局の標準読解テストの成績を上げるために，基礎学力の強化に力を入れざるを得ない状況に置かれたのである。これだけ短期間に Back to Basics が普及した背景には，このような連邦政府の援助があったのだが，このような連邦政府による Back to Basics の一方的な押し付けは多くの教師の反発を招いており，また，連邦政府の指導により始められた公聴会・教師の研修などもあまり評価はされていないようである。

以上，４つの側面から Back to Basics を概観してきたが，Back to Basics について考える時に Fundamental School（基本主義学校）の存在を見落すことはできない。基本主義学校はオープン式のオールタナテブ・スクール[5] に対するものとして73年から設置され始めた学校である。基礎的技能を重視した伝統的な学校運営を特色とする基本主義学校は，おりからの Back to Basics の主張の中で父兄や教師の間から多くの支持を受け，75年には全米で12校に満たなかったものが，79年には１０００校を越えるにいたっている。[6] 基本主義学校は Back to Basics において重要な役割を果たすものであるが，本稿では国語教育における Back to Basics について述べる

ことが目的なので，ここではその指摘だけに留めておきたい。

Right to Read

Back to Basics の他に70年代のアメリカの国語教育を特徴づけるものとして，Right to Read（読解への権利）を挙げることができる。アメリカは60年代から，基礎学力を Survival Skills（生きる力）の1つとして重視する考え方があり，すべての子供は読解能力を持つ権利があるという Right to Read はこの認識から生まれた主張である。Right to Read は特に障害児を対象とした教育のスローガンとして70年代に注目されたものであり，75年に制定された全障害児教育法（EAHDA）の第一条には，すべての児童に対する読解権の保障が明記されている。この Right to Read はかなりの成果を挙げたようで "Reflection" の中では，批判の多かった Back to Basics とは対照的に，多くの教師がこの成果を評価している。Right to Read と Back to Basics とにおける評価の違いは，社会的な要求と無関係にできる障害児の言語教育に対して，社会的な要求や実生活と切り離すことのできない，一般児童の言語教育の難しさをものがたっていると言えよう。

"Reflection" は次の3つの質問に答えるという形式を取っている。

1. あなたがこの10年間で最も重要な進歩として特記する事は何ですか。
2. 80年代への希望（たとえば，解決すべき問題，研究課題，一般に行われている練習の修正など）。
3. 低学年のランゲージ・アーツの教師に読ませたいと考える参考書。

表の左が1の答え，右が2の答えであり，3の参考図書は表の下に示す。ただし，3については解答している場合としていない場合がある。また，専攻分野別の構成は Reading 7人，Writing 4人，Communication 4になっている。次に，それぞれの分野別にまとめて示す。

Reading

Jeanne S. Chall（ハーバード大）

・the Right to Read Effort ――実際の効果よりも精神的影響を評価する。 ・学際的な研究が多くの成果をもたらした。 ・教師の専門家意識が成長した。 ・低学年における読み方能力が改善された。	・害のない形での最低能力試験への期待 ――治療に用いる。 ・研究者と教師とのより多くの協力が望まれる。
National Academy of Education : Improving Educational Achievement The NSSE 77th Yearbook Part Ⅱ, Education and Brain	

E. Radwin and M. W. Ward, Reading, Language and Learning

Roger Farr（インディアナ大）

・読みの教育を社会，文化に関連させて行った。 ・読みを思考過程の一つの相として位置付けた。 ・基礎的な言語能力は肉体的・知的なハンディを克服した。 ・基礎的な言語能力は60年代より向上した。	⟶ 更に発展させることが望まれる。 ・研究技術の質的な向上の必要性←人類学，社会学の利用 ・遂行結果を基準とした指導が必要である。 ・選択可能な教授法の使用が望まれる。

John C. Manning（ミネソタ大）

・Right to Read Program は，障害児には効果があったが，全体としてはあまり効果がなかった。 ・Back to Basics は，社会生活に必要な技術が身に付かない。 ・言語能力テストへの期待が大きくなっている。	・教師の質の向上の必要性→質の高い英文学から生徒を刺激すべきである。 ⇑ 生徒は量ではなく，質の高い情報を求めている。

Robert B. Ruddell（カリフォルニア大）

・70年代への過度の期待は果されなかった。 ・言語活動の分析については，多くの進歩が見られた。	・実用主義，談話の分析，社会心理学の応用を特に重視すべき。→学業不振児へ効果 ・教師の質の向上の必要性 ——教員認定の再試験をすべき。 ・校長，カリキュラムリーダーが大学の研究と協力すべきである。

Fisher Donald, Functional Literacy and the Schools Robert B. Ruddell, Reading－Language Instruction : Innovative Practices Suppes, Patrik, Impact of Reseach on Education : Some Case Studies

Russell G. Stauffer（デラウェア大）

・金の力で読みの能力を向上させることはできなかった。 ↑ ・子供は実験から得られた材料からではなく，社会生活から言語活動を学ぶ。 ・思考の道具としての言語観が生まれてきた。	・8～12才の子供の疑問読み，批判読みの必要性。 ↑ この年令において知的に大きく成長する。
A. M. L. Johnson, The Anatomy of Judgement Department of Education and Science, Children and Their Primary Schools Russel G. Stauffer, Approach to the Teaching of Reading	

Dorothy S. Strickland（キーン・カレッジ）

・Back to Basicsは，学校の運営者，立法者などの教師以外の人から始まった。 ・Back to Basicsの残したもの ―能力テスト，標準化された読み方教授，卒業能力等は評価できない。	・技術と精神（文学）のバランスをとる。 ・読みの発達に関する研究の必要性。 ・教師を中心とした改革に期待する。

Richard L. Venezky（デラウェア大）

・70年代の2つの成功例 1. 強リーダーシップの下でのカリキュラム 高い目標 読みを重視	→これらを目標，焦点，教授法から分析して応用する。

2. 読みの目標(どこまで理解できるか)と課題との関係を十分考慮したカリキュラム	・理解過程の解明が今後の課題である。
Harris A. J., The CRAFT Project : Instructional Time in Reading Research Thompson S., Guidelines for Improving SAT Scores Weher G., Inner-city Children Can Be Taught to Read: Four Successful Schools	

Writing

Alvina Treut Burrows (ニューヨーク大)

・30年前に比べ，若い人は自発的に書くようになったが，能力はいたましく低下している。 ・マスメディアが能力低下の大きな原因である。 ・Back to Basics は技術偏重。(特に小手先的な技術が中心)	・技術，自由放任のバランスのとれた教授が必要である。 ・作文の時間を増やす必要がある。

Kellogg W. Hunt (フロリダ大)

・書き方についての知識は増えたが，確かな方法は見つかっていない。 ・マイアミ大の成功例 ―同じ内容を検討しながら何回も書き直す。 ・筆者の方法 ―タームは使わずに，模倣により構文的な力を付ける。―ただし成功とは言えない。	→この方法を改良する。
Andrew Kerek, "Sentence-Combining at College Level : An Experimental Study", Reseach in the Teaching English 1978 Feb. "Sentence Combining and Syntactic Maturity in Freshman English",	

C. C. C. C. 1978 Feb.

Richard Lloyd−Jones（ローワ大）

・政策者により改革が行われたが，政策者の認識は実際以上に深刻。政策もあまり効果を挙げていない。最低能力テスト，研修，公聴会は一つの流行だった。	・70年代にはあまり注目されていなかった研究（レトリック，言語学，発達心理等）が注目されるだろう。 ・Craft のための時間が増えるだろう。
Cark Klaus，Composing Childhood Experience	

Charles Read（ウィスコンシン大）

・60年代は読みの研究が中心だったが，70年代は書きの研究にも注意が注がれた。←社会的な意見によるものである。 ・しかし，書き方の研究もあまり効果は上げていない。	・子供の書き方をありのままに観察すべき。 ・ランゲージ・アーツの中で，読み方と共に書き方が大きな位置を占めるだろう。 ・書き方の時間の不足はまだ続くだろう。
Bissex G. L.，Learning to Write and Read：A Case Study Chomsky Carol，How Sister Got into the Grog？ Clay Marie，What did I Write？	

Communication

Edmund J. Farrell（テキサス大）

・Back to Basics の生み出したものはあまり評価していない。 ・子供は創造的な communicator という新しい子供観を評価する。 ・標準テストにより技術面のみが重視されて	・子供を受け手と考えずに，活動的な創造者と捉えるべき。 ・子供の達成能力からではなく，人間どうしの相互作用から高めてゆくべき。

いる。	

Martha L. King（オハイオ大）

・子供の能力に注意が払われた。―子供は言語活動の中から構造を直観的に作ってゆく。 ・60年代は言語自体が研究対象であったが，70年代は社会的コンテクストの中で言語を扱うようになった。	・子供の能力をより理解し，伸ばすべき。 ・言語における社会的コンテクストを重視すべき。
M. Halliday, Learning How to Mean–Explorations in the Development of Language C. Cazden et al., Functions of Language in the Classroom	

Virginia M. Reid（オークランド・パブリック・スクール）

・政策として行われた中で，新しい教材などは評価できるが，研修・予算面などは不十分。 ・Dr. Ray Crisp の成功例 ―文学・作文・言語などの枠に捉われず，詩・ドラマ・映画製作などを通してコミュニケーションを学ぶ。	・言語を言語環境の中で捉える。 ・社会的な要求とのバランスを取る。
John Stewing, Read to Write Mimi Chenfeld, Teaching Language Arts Creatively	

Roger W. Shuy（ジョージタウン大）

・多くの学問分野が合流してきているが，向かうべき目標は，はっきりしていない。	・子供は，コミュニケーションにおいて，どの部分が理解できていないか，そして，そ

・従来の分節的な教授に変わり，自然な文脈の中で学ばせる教授が行われ始めた。 ・言語のバラエティ（個人差・社会による差）を承認するようになりつつある。	の理解できない部分を，子供自身がどのようにして解明してゆくかを明らかにすることが，今後の課題。 ・標準テストには反対。

“Reflection”を次の12点からまとめることができる。

	(人数)
(ア) Back to Basics への批判[7]	7
①Back to Basics は技術偏重	4
②行政・世論の誤った認識への批判	4
③文学教育の必要性	2
④その他の批判	3
(イ) Back to Basics を評価（基礎的な言語能力は向上した。）	3
(ウ) Competency Test について	
①反対	4
②賛成	2
(エ) 教師の質向上の必要性	2
(オ) Right to Read について	
①失敗	1
②成功	2
(カ) 言語を社会の中で捉えることの必要性	5
(キ) 学際的な研究の必要性	4

これらの中でも特に重要と思われるのは(ア)の「Back to Basics への批判」である。Back to Basics が70年代後半のアメリカの国語教育を特徴づけるものであるだけに，Back to Basics にこのような多くの批判の向けられていることは，80年代の国語教育に再び大きな方向転換のあることを予想させるからである。ここでは，この Back to Basics の問題を中心に“Reflection”をまとめていきたい。

基礎的な読み書き能力を重視する Back to Basics には，その裏返しとしての(ア)①技術偏重という批判が当然考えられる。Back to Basics での教授法は「他人の文を完成させたり，ばらばらな断片（になった文）に句読点を打つなど，ワークブックの空欄を埋める以上の作業を児童に要求しない。」（A. T. Burrow）といった小手先的なものが多く，ここから「おそらく学校で身に付く技能は，価値のあるものを読むことを十分楽しめる技能ではないだろう。」（J.C. Manning）といった批判が出て来る。(ア)③の「文学教育の必要性」の主張も，(カ)の「言語を社会の中で捉える必要性」の主張も，ともにこの小手先的な技術の偏重に対する批判と考えられる。このように“Reflection”に見られた国語教育への批判の多くは Back to Basics，特にその技術偏重の姿勢

に対して向けられたものである。この批判を基礎的技能を重視する Back to Basics そのものを否定しようとする意見と解釈することもできる。しかし，「他から孤立しない位置で言語技術を教授すべき」（D.S.Strickland）という意見に代表されるように，行き過ぎた技術重視に対する修正，すなわち，技術と他の適度なバランスを求めたものと解釈すべきではないだろうか。(イ)のように Back to Basics の効果を評価した意見もあることから，Back to Basics が否定的にのみ捉えられているのではないことが分かる。更に，70年代における読み書き能力の低下が，非行の一因であると言われるほど深刻な社会問題になっていたこと，先に述べたように，読解能力が Survival Skills の一つとして重視されるようになったことなどを考慮に入れると，後者の解釈の方が妥当であると思われる。

(ウ)の Competency Test にも反対意見が多く見られるが，この反対意見はいずれも Competency Test が Back to Basics の技術偏重の傾向を助長しているという内容であり，Back to Basics の技術偏重が緩和されれば Competency Test に関するこれらの批判も当然弱まってゆくであろう。一方で，「現在，州や地方・地域のレベルで Competency Test を歓迎するようになった。」(J.C.Manning）と言われるように Competency Test は社会的に承認されつつあり，今後も広がっていくものと思われる。

70年代アメリカの国語教育に対する批判は，Back to Basics の技術偏重の姿勢に対する批判にほぼ集約することができるが，これらは Back to Basics を否定しようとするものではない。この点から80年代の国語教育は行き過ぎた技術偏重を修正しながらも，基本的には基礎重視の方向を維持しつつ展開していくものと予想される。また，国語科と心理学・レトリック・談話分析などの関連分野との協力も，言語活動を社会の中で捉えてゆくべきであるという主張を受けて，80年代にはますます強まることであろう。

〔注〕

1）Back to Basics は本来スローガンであるが，これをスローガンとする運動も Back to Basics の名で呼ばれる。本稿では Back to Basics を後者の意味で使用する。

2）"Why Johnny Can't Write" Newsweek（domestic issue）December 8,1975 の内容を簡単に紹介しておく。ここでは，まず，1965年以後学生の読む力が低下していることを指摘した Department of Health, Education, and Welfare の発表，Scholastic Aptitude Testの成績が過去20年間にわたって低下し続けていること，アメリカ人の多くは書く際に最も簡単な構文と語彙を使用し，特にティーンエージャーに書く力がないことから，読み書き能力の低下が強調され，次にその原因として，家庭におけるテレビの普及と学校における児童数の急激な増加，進歩的な国語教師が作文の代わりに映画・ビデオ・写真等をカリキュラムに入れたこと，更に作文力のない国語教師の多いことなどが挙げられている。

3）Vernon H. Smith "Beyond Flax and Skinner: A Personal Perspective on Teaching English, 1954 — present"（in the English Journal 1979,vol68－4）。

4）Competency Test は標準英語で作製されているため標準英語を使用していない黒人などの少数民族が不利になってしまう。このため，80年代に入って黒人の間からこの試験に対する公訴が行われている。（佐藤三郎「アメリカにおける教育方法研究の展望」（『現代教育科学』No. 283））。

5）Alternative School は70年代前半の学校改革の中で生まれた公立の学校で，文字どおり生徒・父兄・教師が自分の好きな学校を選択できる制度である。Alternative Schoolの主な特色としては，伝統的なカリキュラムに捉われないこと，児童・生徒の興味・関心を重視すること，児童・生徒の人種別比率が考慮されていること，一校の児童・生徒数が300人を越えないミニスクールであることなどが挙げられる。このように，Alternative Schoolと基本主義学校はその性格を全く異にするものであるが，両者は同じ学区内に並存しており Alternative School の選択可能な学校の一つとして基本主義学校を置いているのが普通である。（伊東博「アメリカにおける学校改革論」（『現代教育科学』No. 267））。

6）Vernon H. Smith 前掲論文。

7）(ア)「Back to Basics への批判」の数は，何らかの形で Back to Basics に批判をしている投稿者の数である。一人で複数の点について批判している投稿者がいるため①～④の合計にはなっていない。また，④その他の批判は，研修・公聴会・予算などについての批判である。